様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２９日現在

機関番号：82702
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007　～　2010
課題番号：19720037
研究課題名（和文）　近代日本絵画史における鉛筆の意義

研究課題名（英文）　The role of the Pencil in modern Japanese art history

研究代表者
角田　拓朗（TSUNODA TAKURO）
神奈川県立歴史博物館・学芸部・学芸員
研究者番号：80435825

研究成果の概要（和文）：鉛筆は現代に生きる我々にとっては、もはや古いツールである。しかし、幕末明治の頃にあっては、新奇なツールであった。美術の文脈にとっても新しいツールであり、それまでの毛筆と墨などを主とした絵画表現とは異なる様相をもたらした。特に油彩画や水彩画を学び始める以前、その初学の者が利用することが多かった。なぜなら、油彩画、水彩画の道具、絵の具類は輸入品であり、高価だったためである。そのため、鉛筆と紙でもって洋画技法を学ぶことが強いられた時代があった。その制限された時代状況があったものの、そこから新しい表現が生まれていったことを本研究では明らかとした。

研究成果の概要（英文）：We think the pencil is an old tool. But, it was brought to Japan around 150 years ago, so it was not older than the brush. In Japanese art history, it is a new tool and caused new painting. Especially ones who started to learn western style painting used them. Because materials of oil painting or watercolor painting were expensive, they could not buy the materials. So, they painted anyone by a pencil. I find the artworks were one of the new potential for Japanese art history at that time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	350,000	150,000	500,000
2010 年度	150,000	0	150,000
年度			
総　計	2,200,000	330,000	2,530,000

研究分野：近代日本美術史
科研費の分科・細目：哲学　　美学・美術史
キーワード：近代日本美術史　近代日本美術教育史　洋画　五姓田派

１．研究開始当初の背景

本研究を着想するに至ったのは、研究代表が所属する機関である神奈川県立歴史博物館に収蔵されている600点をこえる洋画家五姓田義松の作品群を実見したことにある。その大半が明治前半期までに鉛筆で描かれた素描群である。現在まで積極的に公開されるに至らなかった作品群であるが、鉛筆で描かれている点に興味がひかれた。本研究以前に近代日本画における毛筆の線の意義について調べてみた経験もあり、鉛筆の線が示す意味内容により一層興味がひかれた。

幕末明治期における鉛筆画の状況はどうだったのかと思い、先行研究を漁ってみたところ、充分な論説が見出せなかった。先行研究において、鉛筆が近代美術教育の主人公になったことはしばしば指摘されてきたが、一方、鉛筆で描かれた絵画に関する考察が不足

している点は驚きでもあった。鉛筆が絵画に対してどのような効果をもたらしたのかについては、明らかにされてきたとは言い難いということだろう。特に五姓田義松の作品群は近代に分化される「日本画」と「洋画」の未分化な状態を如実に示し、かつ近代絵画が失った次代の雰囲気もあるように感じられ、その印象をひきたてるのが鉛筆という画材であることにより一層の興味を覚えた。鉛筆が果たした役割を具体化すること、これが本研究の課題の核である。

日本美術史の研究において、しばしば言及される断層、近世と近代の断層を考えるに、新しい描写ツールに注目するのは効果的だろう。近世以前はおおむね「毛筆」という唯一物に限定されるような状況であったと推測される。だが、西欧との本格的な接触以後、油彩画を描くための絵筆、水彩画を描くための絵筆、鉛筆、コンテ、チョーク、ガッシュ等々、様々なツールが受容された。確かに近代絵画を代表する存在が油彩画であることに疑いはないが、ただし、高橋由一が油彩画道具類に苦心した事例が示すように、そもそも絵の具・顔料とその基底材である膠・油の差異はあれ、大きな意味では同じ「毛筆」をコントロールして描く絵画といえる。もし近世近代の断層を象徴的に見るのであれば、毛筆とは性格を異にするツール＝鉛筆に注目する方が相応しいのではなかろうか。鉛筆というツールこそ、近代絵画の基底になった画材であり、そうであるならば、鉛筆こそ近代絵画を象徴する存在と考えられはしまいか。

２．研究の目的

研究の着想から、鉛筆を支点にして、近世・近代のそれぞれの絵画構成の思考パターンを明らかにすること、そして大きな意味での文化史的な変容の記述にも挑戦すること、それが本研究課題全体の大目標として設定された。具体的には、以下の三点を明らかにすることを柱とした。

①鉛筆画の全容と系譜
②鉛筆の絵画的効果とそれに伴う主題の傾向
③鉛筆により隔てられたとも考えられる「近世絵画」と「近代絵画」、そして「日本画」と「洋画」という二つの絵画思考について

以上の柱をさらに具体化すれば、以下のようになる。

第一点だが、鉛筆画の網羅的な把握は、物量的な意味でおそらく不可能に近いことが予想され、その展開の端緒となる明治期に集中して調査を行うこととする。ただ、当然のことながら、大正以後の動向にも留意する。何故なら、その時期に下絵作りの用具として、鉛筆から木炭やコンテへ完全に移行した時期と考えられるからである。鉛筆以後という視点も忘れないことで、その全容と系譜の偏在の意味が解明されることと期待される。

第二点の鉛筆の絵画効果については、毛筆の効果・意義との比較対照が重要となると予想される。毛筆がいわゆる「線」という理念により、絵画の一要素のみならず画面全体の精神性のあらわれであると、中国の唐朝以来の画論書で理論化されてきた背景がある。近代においても、その特性が日本画の各ジャンルにおいて継承されていたことも認められる。線が「明暗」「量感」「画格」を表現する役割を担ったが、同様の意図が鉛筆にもこめられていたのだろうか。その効果に伴う主題の傾向があるとすれば、それは第三の問題点に直結する。

第三の問題点について。先行研究を踏襲し、鉛筆が近代日本美術教育の前駆的な主役とすれば、木炭・コンテは油彩画下絵に用いられた後発の画材となる。それらとの差異、そして当然のことながら「洋画」の中でも本式の絵画であった油彩画に認められる筆線の意義との差異を考察し、明らかにしよう。ここに本研究課題の広がりがある。すなわち、鉛筆画を軸とする一方で、面的な筆遣いにより描写形態の把握につとめる油彩画との差異を厳密に考察し、鉛筆画をもとにして制作されたと思われる多くの石版画や、同質の線描を基本構成とした銅版画をも視野に入れるという広がりである。ややもすれば、研究軸を見失う危険性すらある。だが、複数ジャンルの相互連環は指摘されながら、作品形態のレベル及び構成要素レベルでの齟齬という議論を組立てることは、その連関という事象を批判検証する上で欠かすことのできない作業であろう。この議論構築においては描線、しかも日本画・洋画・版画という交差的な視点が必要とされ、ここにおいて結節点としての鉛筆画が再度、浮上してくると予想される。

３．研究の方法

調査研究が空論とならないよう、個別具体的な作家、作品研究を基礎とした。調査要点は以下の四項目で、従来の美術史学的な調査研究方法が有効と考えられた。

①鉛筆という材質について：濃度・硬度・滑らかさ・輸入材か否かなど
②線の効果：輪郭・質感・量感・陰影・動静など
③作家の特定
④制作年代の特定

以上のポイントに注意を払いながら、随時、各所蔵機関で所蔵する関連作品の調査をおこなった。特に核として、五姓田派の作家、作品を集中的に調査研究し、モチーフの共通性、技術の共通性、紙質の共通性など、細部

の検証を継続的におこなった。
　また、調査研究の過程で見出された個人所蔵の作品・資料群を調査し、鉛筆を積極的に取り入れた明治期の図画教科書に関する目録をなすことができた。
　また、当初はデータベースの構築を視野に入れていたが、その数量が意外と多かったことなどから断念した。特に個人所蔵家の作例等については調査の許可などを得ることが叶わず、遺憾であった。

４．研究成果
　本研究の成果は、主に以下の三つにまとめられる。
①五姓田派に関する包括的、かつ鉛筆を軸とした技術伝承の過程の解明
②橘忠助氏旧蔵美術資料群の発掘とその整理作業。特に明治初期洋画の作品・資料群についての同定。
③近代日本絵画史における鉛筆の意義と、その概要について
　以下、それぞれを具体的に記したのち、今後の展望を記す。

①五姓田派に関する包括的、かつ鉛筆を軸とした技術伝承の過程の解明
　五姓田派は幕末から明治前半期にかけて、本格的に西洋絵画技術を日本に受容した絵師・作家集団として従来知られていた。しかし、その具体像については明らかとなっていなかった。特にその中核の作家である五姓田義松から技術がどのように伝承されたか不明であった。
　その点について、全国の所蔵機関の作品を調査した結果、興味深いことに、鉛筆を使用した、クロス＝ハッチング技法による自画像表現が相次いで発見された。それは義松の弟子たちに継続して用いられ、年代としては明治初頭から明治二十年代後半に及ぶ。その技術伝承の経路として、五姓田工房、画塾が未発達な時代における技術習得の具体相を推定した。
　重要なことは、鉛筆で描かれた作例は共通して、いわば裏方の仕事であると意識することだ。すなわち、展覧会出品作や売り絵が表舞台の作例であるとすれば、鉛筆で描いた作例はそれを支える存在であるという点だ。このことは従来も意識されてきたが、そこに画家の日常的な姿があることを本調査研究では特に強く主張し、意識的にその具体相を明らかとした。
　以上の成果を軸として、五姓田派以外の作家集団の作品等についても調査研究をおこない、その様式、作風、意識の違いについて論じた。具体的には、五姓田派と同時代に活躍した不同舎との比較をおこなった。前者が対象を描きおこす傾向があるのに対し、後者は対象を画面の中の一景物とする傾向があることを指摘した。それはおしなべて空間に対する意識の問題であり、五姓田派以後、明治後半以後の洋画、そして日本画に求められる意識への醸成をも裏付けるものであった。

②橘忠助氏旧蔵美術資料群の発掘とその整理作業。特に明治初期洋画の作品・資料群についての同定。
　本調査研究の過程で、橘資料群と出会い、その概要調査等をおこなった。それは、昭和戦前期にいち早く幕末から明治にかけての洋画を研究した銅版画家西田武雄が蒐集し、のちに橘氏に譲られたものである。同資料群はその存在が知られていたものの、公にされたことは一度もなく、今回の調査研究の一環として明らかとした。
　本調査研究と結びついて興味深いのは、先に指摘した鉛筆への軽視という傾向が西田には見られないことである。鉛筆の重要性について西田が理解していたことを裏付けるのが、同資料群におさまっている明治初期画学生スケッチとしるされた一群の鉛筆画である。
　それらについて、研究代表者は作家の同定、制作年代の特定を試みた。結果として、作家名までは同定できなかったものの、五姓田派及びその周辺という推定を提示した。また、時代としてもその様式などから、明治初頭から十年代半ばまでと推定した。昭和初頭の段階で、それらが洋画史を語る上で貴重な参考資料と見抜いた西田の視野の広さを、改めて認めることができた。
　さらに、西田も指摘するように、それらは当時の画学生たちの日常を知る上でまたとない資料であり、作品である。そのうちの半数ほどは、和紙に鉛筆で描いた作品であることからも当時の状況をうらなう上で重要な作品群であることを明らかとした。

③近代日本絵画史における鉛筆の意義という概要についての思考
　鉛筆が渡来して以後、盛期、そして衰退という時代変遷を明らかとした。
　鉛筆が渡来した頃、すなわち幕末頃には、それは重要な画材であった。鉛筆は、そもそも油彩画、水彩画が手に入らない時代においては、洋画そのものであった。画塾の師範クラスともなれば、絵の具はあったろうが、たいていの画学生には高価なものであった。そのため、鉛筆は代用品という位置付けであったことはうたがいない。また、図画教育が整備されたために、かえって初学の者がなす画材という意識がさらに強まった。コンテやチョークがその後利用されるようになった結果、明治後半から大正前半には画材として重

視される機会はさらに減ったことだろう。
　以上のことを考えると、油彩画を偏重する日本の洋画シーンの奇異さを指摘することも可能だ。洋画技術とは、三次元の二次元化を主とするわけで、画材の差異が主眼ではないからだ。にもかかわらず、日本において「洋画」とはすなわち「油彩画」となっている。
　そのような大きな歴史意識の流れを指摘する一方、明治初頭の画学生の意識に焦点をあて、鉛筆への信頼をも明らかとした。具体的には、鉛筆しか利用することのできなかった若者たちが思いのたけをぶつけるかのような筆圧の強く、濃度、密度ともに高い自画像を描いている。そこには鉛筆であっても洋画をなすという強いあらわれがみてとれ、従来指摘されてこなかった鉛筆画の魅力についても明らかとした。
　そして、さらに比較対照して、油彩画、水彩画へのあこがれが強かったことを浮き彫りにした。明治期の色彩に対する感覚、絵の具の使用、紙への意識など、それらを理解するためには鉛筆でもって日常の制作を続けていたという事実に目を向けるよう促した。

今後の展望
　本調査研究の反省を二つ挙げ、今後の展望としたい。
①日本画家への言及の欠如
　鉛筆というテーマについて、このテーマを着想したところの明治前半の洋画という枠を中心とした。結果として、日本画家への言及が欠如してしまった。このことはたいへん遺憾であり、むしろ日本画家こそ、その使用により「近世」「近代」という大きな時代の断絶を物語る存在となりえたからだ。
　今後は彼らの動向をも視野に入れつつ、洋画との比較対照を試みたい。

②文化史論的な視点の欠如
　着想段階では、現在まで連なるツールと表現と身体との相関関係を描くことを模索していた。しかし、調査研究をより具体的に進めるために、如何せん、そのことについては具体的に言及しえなかった。鉛筆の受容、利用は多くの人間にとって与えられた大きな変革ツールであり、単純に絵画史のみにはおさまらない問題であることは常々意識はしていたものの、まったく本研究とはリンクすることが叶わなかった。
　特に昨今のメディア状況を鑑みたとき、既に鉛筆は古式ゆかしいツールという印象がある。その存在価値、利用の具体を今記述しないとその機会を失う恐れすらある。鉛筆画の魅力を語ることが、その機会を促すくさびになるよう心掛けたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①角田拓朗、橘忠助氏旧蔵美術資料群について、神奈川県立博物館研究報告　人文科学、査読無、37、2011、25-68

②角田拓朗、初代五姓田芳柳事歴考―横田洋一氏が追求した「横浜美術史」と「リアリズム」―、版画史研究会誌、査読無、1、2011、28-39

③角田拓朗、五姓田派の絵師　土方力三郎、幕末史研究、査読無、43、2009、144-157

④角田拓朗、満谷国四郎《自画像》の彷徨い―五姓田派の所在を問うことの意味―、美術研究、査読無、397、2009、18-78

〔学会発表〕（計１件）
①基調報告　五姓田派の全体像について、明治美術学会例会　シンポジウム「未知なる五姓田をめぐって」、於横浜美術館レクチャーホール、2008

〔図書〕（計１件）
①角田拓朗他、神奈川県立歴史博物館、「五姓田のすべて―近代絵画への架け橋―」展図録、2008、256

６．研究組織
(1)研究代表者
角田　拓朗（TSUNODA TAKURO）
神奈川県立歴史博物館・学芸部・学芸員
研究者番号：80435825